ひと街しごと

No.18

二〇〇七年 冬（年四回発行）
発行：㈱印刷紙工
札幌市中央区南十五条西十八丁目
TEL（〇一一）五六一一三九七
編集：ひと街しごと刊行会
札幌市中央区北一条西十七丁目
北海道不動産会館四階
㈲編集工房 海内
TEL（〇一一）六三一一六六五二

語り継ごう、明日へ。

歴史はいつも未来へのみちしるべです
世の中の進むスピードと自分の生きていくペースが
少し合わなくなってきたなと感じ始めたら
いつか来た道まで戻ってみましょう

冬こそ本番、遊びの天才たち

街も家の中も暖かくなったお陰で、外の気温が少し下がっただけで寒い寒いといって室内に閉じこもってしまう大人たち。その一方で、朝から外に飛び出して雪遊びに夢中の子供たち。冬こそ遊びの天才の本領発揮というところでしょう。

とはいえ以前ほど外から子供たちの歓声が聞こえてこなくなったのもまた事実。道具が手に入らなければ自分たちで作ったり、空き地を遊び場に変えたりという工夫は、もう過去のことでしょうか。年長者が年下の子に作り方を伝えるという世界もありました。

雪などめったに積もらない地方の子供たちは、たまに雪が降ると孟宗竹を割って薄く削り、先端部を火であぶって曲げてスキーを作ったなんていうこともあったそうですが、こちらもいまはどうでしょうか。

北海道開拓の村の旧福士家住宅の洋館部は明治6年から23年まで市立札幌病院の診療室だった

市立札幌病院

下水に鮭がのぼった……北一西八で百年の歴史

病院といえばあまりよい思い出はないでしょうが
現在地に移る以前の場所での診療は百年以上も
それだけに札幌市民にはまだまだ記憶に残っています

100年以上の歴史があった
北1西8当時の全景(昭和44年11月撮影)

同じく北1西8当時の本館正面。大正12年完成で、
写真上への建て替え竣工は昭和31年(昭和29年9月撮影)
(上と共に札幌市写真ライブラリー提供)

開拓判官・島義勇が円山に登って札幌建設の構想を描いたのは明治二年（一八六九）。このとき、函館から陸路で銭函に着いた一行が付近の民家を借り上げて開拓使治療所とし、それが札幌元村（現在の東区北十三条東十六丁目付近）の小屋に移されたのが札幌市の病院の、そして市立札幌病院の始まりです。

開拓使病院三等医師・斎藤龍安の元村診療所到着が翌三年一月。次の年には北一条東一丁目付近（現在の鉄道病院敷地内）に新病院が完成し、初めての入院患者を迎えています。以来、明治二十三年（一八九〇）まで、ここが札幌の医療機関の中心でした。

そして次なる時代の始まりが、翌二十四年の北一条西八丁目への移転。多くの札幌市民の記憶にある場所です。平成七年（一九九五）に現在のJR桑園駅北側へ移るまで、実に百年以上にわたって同じところに所在していたのですから当然でしょう。

北一西八に移転するときに、住民から「遠くて困る」という声が上がったのに対して、当時の第三代院長であったフェルジナンド・グリンムは「十年後の札幌は現在の幾倍もの大都市になっているだろう」と答えたそうです。

その十年後の幾倍を確かめることはできませんが、昭和三十四年に創立九十周年を迎えたときの記念座談会が、同年十月の広報「さっぽろ」にありました。その中に〝病院の下水に鮭がのぼった〟という見出しで以下の話が――。

丸山　現在の病院の庭に川があって、鮭が泳いでいたそうですが……。

仙場　川でなくて下水です。水がふえると鮭がのぼってきました。一番印象に残っているのは、現在の大通りの西一丁目から九丁目までが練兵場、よく分列式をやっていました。それから円山まで何もなく広々としていました。病院の二階からの眺めは放牧場で牛が草を食べている……全く街中とは思えなかった。（仙場医師は明治四十一年から大正四年まで市立病院に勤務した方です）

こんな時代があったとは思えないほどの、現在の市立病院の威容。札幌市も幾倍どころか、人口は百八十五万人に膨らんでいます。

JR桑園駅北側にそびえる市立札幌病院

※参考文献／「札幌事始」（さっぽろ文庫7）、「中央区 歴史の散歩道」「市立札幌病院百年史」「同百三十年史」

マチの博物館

手作りホビーキット さくらほりきり

札幌市中央区南二条西七丁目
電話(〇一一)二八一一四七七

木目込みパッチワークは女性ならではの手先の作業
でも誰でもこなせるかといえば中には苦手な人もいます
そこで簡単に出来るようにとキットをそろえて
夢を広げてくれるお店を見つけました

見ていると思い出す紙や布の手ざわり、作る楽しさ。

最初にお断りしておきたいのが、写真の商品はすべて売り物ではないということ。ならばこちらはいったい何を販売しているの、という質問もごもっともです。つまりそれがホビーキット。見本どおりに作る材料一式ということです。

そしておそらく次の疑問は、こんな難しそうなものを作れるのだろうかということ。でも、仮に途中で投げ出したくなるような作り方だとしたら、ここまで歴史を重ねられたでしょうか。通販と店舗販売で今年、創業三十年を迎えるというのですから、いかにやさしい作り方で、多様な商品を生み出してきたかです。

型を抜いて箱を作ることを生業としていた創業者が、一般の人にも和紙を貼るなどして趣味の世界を広げることを着想。

カントリ調にデザインされ、タペストリーにも最適。パッチワーク風の木目込み

簡単にできて、飾ったり贈ったり――。

現在では布を使うものも含めて、木目込みパッチワーク、インテリア、和紙工芸品、民芸小物、アクリル七宝、ビーズ手芸、デジタルアートにまで広がっています。身近なところでは和紙を貼ったミニタンス、ティッシュペーパーボックスなどを見たことのある人もいるでしょう。

様々な図柄を自分で作る楽しみ……

女性客が九割というのは、男性の模型工作に匹敵。簡単なものなら目打ち一本で完成するとあれば、作るのが楽しいし、人にあげても喜ばれるというものです。新たに挑戦したいという人たちのために、店内や出張で講習を。幼稚園や小中学校、PTA、婦人会の集まりなどどこへでも出向きます。

東京を本社に札幌、名古屋、福岡に店舗があり、札幌店は昭和五十五年のオープン。店長の内藤広宣さんに北海道のお客さんの特徴を聞くと「どちらかといえば干支や和のものより新しい図柄に人気があるようです」とのこと。レギュラーものと季節ものとがあって、これからはおひな様に関連したものの出番です。

忘れかけていた紙や布の風合いは、何かにつけて慌しい毎日の癒し。最近は、手を使うことが身体機能の回復にも適しているということで、福祉施設などで作業療法に取り入れるところが増えているそうです。これも和紙工芸の一つの現代性でしょう。

上／定番の民芸小物　下／新柄が揃う和紙のコーナー

業界みるきく

まちづくりに起つ

車で週末のまとめ買いに行く郊外の大型店の人出の多いこと。その一方でいつも利用してきた近所の商店街には空きが目立ち、かつての賑わいもなくなってきています。そうした現実の中で、なんとかして地域に元気をと地道な努力を続けている人たちを紹介しましょう。

地域を元気に!! 活動拠点は商店街

JR駅前整備に関わって障がい者と健常者が交流

白石まちづくりハウス

（札幌市白石区平和通三―北三―一）

通勤通学に毎日利用する駅前の花壇がきれいに手入れされているのは気持ちのよいものです。JR白石駅前でそうした活動の中心になっているのが、白石まちづくりハウスの運営に携わっている人たち。駅から徒歩三分。誰でも気軽に立ち寄れそうな看板が目印です。

発足のきっかけは平成十一年、JR白石駅周辺地区街づくり協議会が設立され、新駅構想の具体化に向けた作業が続く過程で、活動拠点が必要になってきたことから。駅前通りの空き店舗を活用し、商店街から独立した運営にしていくことになり、現ハウスを八十人余の会員による運営としたのです。

さらに、地域の小規模作業所に店舗の管理を委託するという方法で平成十五年六月に正式スタート。障がいのある人と健常の人との交流の場としても絶好でした。

しかし「自主運営に苦労は付きもの」というのは白石駅前通りで不動産業を営む代表の白石俊信さん（六七）。喫茶コーナーを設けたり、作業所の人たちが作る小物の展示・販売、二階集会室の貸室などで運営資金を捻出しています。

その奮闘ぶりが徐々に浸透している証拠の一つは、幅広い層の集会室の利用。幼稚園のお母さんたちが人形劇をしたり、クリスマスには三百人以上の人が集まり満員札止め。毎月一回開く「地域の茶の間」ももう二年も続いています。

白石さんは「新しい白石駅が出来るのは平成二十二年度ですが、私たちも駅前ガーデンや駐輪場の管理に加われるよう、ハウスの活動を維持していきたい」と駅の完成を心待ちにしています。

白石まちづくりハウスはJR白石駅前から歩いて3分

大型店は工業地区に進出 街なかの小規模店は減少傾向

日ごろ私たちが肌で感じている商店街の活力低下が、端的に統計に表れています。

経済産業省「二〇〇五 我が国の商業」によりますと、昭和五十七年以降平成十四年までの立地環境特性別の小売業指数では、商業集積地区、オフィス街地区、住宅地区、工業地区ともに事業所数は減少傾向にあります。

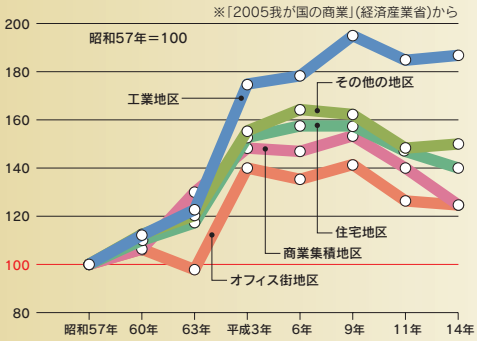
年間販売額も、いずれの地区も平成九年まではおおむね上昇傾向ですが、それ以降は特に商業集積地区で急激に低下。工業地区が大型店やコンビニエンスストア、ドラッグストアなどの進出もあって大きく上昇しています。

このことは一事業所あたりの年間商品販売額の指数で見ても顕著で、工業地区は商業集積地区の一・六倍にもなっています。

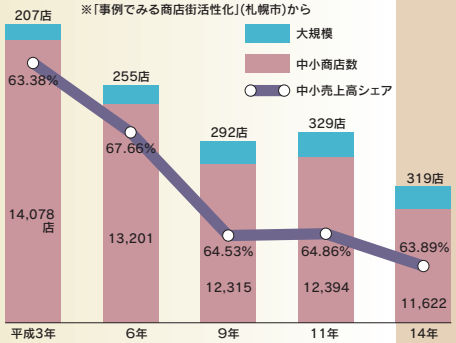
また同じ商業集積地区でもその形態で駅周辺型、市街地型、住宅地背景型、ロードサイド型などに分けられますが、平成九年から十四年のわずか五年間で、市街地型や住宅地背景型が減り、ロードサイド型の増えていることがわかります。

一方、札幌市の統計でみてみますと、中小の小売商店数、売上高ともに減少の一途。特に従業員の数による規模別の商店数では、百人以上の大規模店の伸びが著しく、逆に九人以下の小規模店は減少傾向が続いています。

●指数でみた立地環境特性地区別年間商品販売額



●札幌市内商店数と中小商店の小売業



「つきさっぷ新聞」を核に町内会、大学とも連携

記念日工房

（札幌市豊平区月寒中央通四丁目四―二一）

歴史のある商店街や地域住民の賛同を得てコミュニティー活動を起こすのは大変なこと。さらにそれを継続していくのはもっと困難

を伴うものです。

今年で設立三年を迎えるという記念日工房が、その活動の柱の一つとして企画・編集を手がけている「つきさっぷ新聞」の発行元には月寒地区連合町内会、つきさっぷまちづくり懇談会、そして月寒中央商店街振興組合三者の名前が。いかに地域の信頼を得ているかがわかります。

空き店舗を活用して商店街の活性化に取り組もうと、まず始めたのがラッピングや案内状など記念日を楽しく演出するお手伝い。続いてパソコン教室や住まいの相談室、まちの保健室の開設、有機野菜の販売など。いずれも地域の人たちに気軽に来てもらって、コミュニケーションの輪を広げようという試みです。

同工房運営委員の一人である月寒中央商店街振興組合の山田良一専務理事によりますと「たくさんの地域の人に参加してもらうために、商店街の活動とは別のスタンスが必要」と、札幌大学の先生にまで運営委員に加わってもらったとのこと。

先生がこの工房内でゼミを行ったり、学生が前述の新聞を卒論のテーマにしたり。パソコン教室の講師も学生です。「商店街の仕事を手伝ったり、地域に出入りすることで、学生たちも住民と接する喜び、大切さを学んでいるようです」（山田専務）。

こうした活動がどのくらい地域に知られているのか――マネージャーの石黒広美さんは「月寒に住んでいる方の二割くらいでしょうか」と。しかし新聞の発行部数一万四千部は小規模自治体の広報にも匹敵。地域に増えるマンション住民の町内会加入を促進する役割も果たしており、近い将来の地区公民館の運営にまで視野は広がっています。

パソコン講座のほか案内状などの制作も

すぐ近くには
アンパン道路がある

センスの効いた入口
中は様々な催しに使われている

昨年十二月で創刊十二号を重ねる
「つきさっぷ新聞」

上／ハウス内の喫茶コーナー
下／小物の展示販売も

かつての丘珠玉ネギ街道にファイターズファン集う

ファイターズ通り応援団（札幌市東区北九条東七丁目）

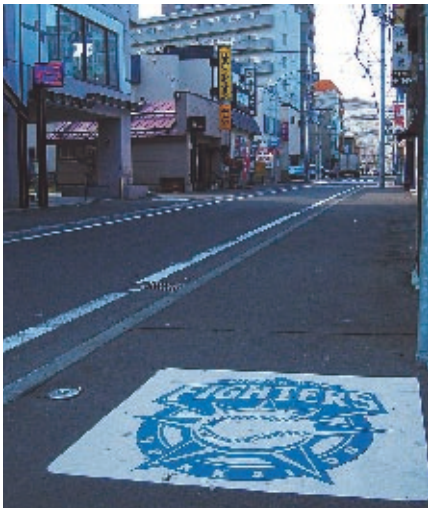
白石まちづくりハウスと記念日工房に共通したことがありました。それは北海道日本ハムファイターズの応援やファンクラブの集いで大いに盛り上がったこと。でもファイターズの応援ならこちらが本家本元、商店街にずばりそのまま名前を付けちゃったのですから――。

その名もファイターズ通りとは東区役所に程近い〝なめ通り〟のこと。かつては東区特産のタマネギを札幌駅まで運んだ丘珠タマネギ街道に、鉄東中央商店街振興会と元町通り商店街の二つの商店街が軒を連ねていますが、その賑わいも札幌オリンピック頃まで。いつしか後継者も減り、店舗の空きが目立つようになりました。そこへ日ハムの北海道移転、商店街近くでの練習場と選手寮の建設。すぐに応援団を立ち上げてファイターズ通りを名乗ったものです。

結成は移転前年の平成十五年六月。その年八月の西武ライオンズ戦にはそろいの法被、横断幕で札幌ドームに駆けつけています。そして翌年からの本格活動は、少年野球教室の開催、イベントや地域FM番組への参加など。創業八十年という酒店の四代目、応援団長の加賀谷熙さん（六一）は「雪まつりやいかだ下りに参加したり。YOSAKOIソーランの会場にもなっています」と大忙し。本業の方がおろそかになりがちと笑います。

商店街の空き店舗にも新しい店が開業。通りにある市営住宅の昨秋のテナント募集では二店舗に十倍の申し込みとか。ドームで試合があるときには、日ハムの選手がふらりと立ち寄る店もあるといいますから、お店も買物に来る人もハプニングを期待できるというものです。

加賀谷さん目下の心配は、新庄選手と小笠原選手のいなくなったこと。「初心に帰って一からやろうと皆で話しています」と。団員数は現在四百七十人とのことです。



日ハムのロゴマークが舗道に堂々と

野球でよみがえる商店街

レジを飾るファイターズのグッズ類

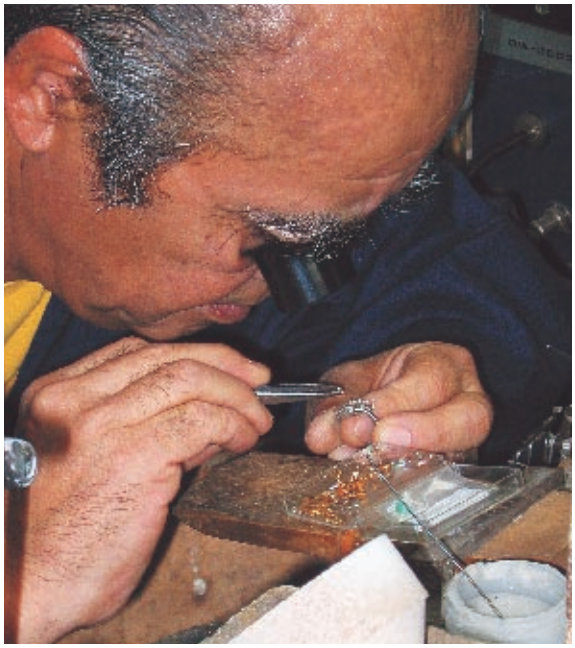
来た道、行く道。

様々な先達がいるからこそ
二十一世紀があるんだよ――
スローコミュニケーションを求めて。

本欄への自薦、他薦をお待ちしております。

伝統技術を誇る職人仕事を、どうやって次の時代に伝えていくかは、多くの業種が抱えている悩みでもありますが、一方で若い人たちが徐々に新しい波を起こしつつあるのも事実です。

創業百年を目指し、やがては三代目を継ごうという野本貴金属加工所の野本政夫さん（三四）が、コンサドーレ札幌のサポートシップスポンサーに名乗りを上げたのは七年前。自らもサッカーファンで、チームのささやかな金銭的バックアップと、オリジナルのマーキング・プレートを制作してファンの拡大に努めるためでした。パソコン操作にも詳しく、今ではネット市場にも出店して全国から様々な注文を受け付けるほどに。


銀の指輪の台にダイヤモンドをはめ込む細かい作業。熟練の技がさえる

その政夫さんから教えられて、これまたオリジナルの指輪などの作品を行く先々で、携帯電話で披露しているのが父親の野本洋二さん（六五）。「ちゃんと覚えてくれよと息子に叩き込まれましたよ。この年で携帯をこんなに使えるなんてびっくりされます」と自慢げです。

実は洋二さんも政夫さんも国家検定の貴金属装身具製作作業一級技能士。洋二さんは長らく札幌貴金属工芸組合長を務め、平成九年（一九九七）には北海道産業貢献賞を授与されています。

同社の創業は洋二さんの父、故野本房五郎さんが昭和五年（一九三〇）、勤務していた東京の宝飾会社が札幌に分工場を出すというので、職人を引き連れて来道したのが始まりです。洋二さんが後を継いだのは二十九歳のとき。小さい頃から家業を見てきたので、継ぐのにも何の抵抗もなかったといいますが、心に残る父親の言葉一つが「女性のいる限りこの仕事は廃れない」ということ。自宅二階の十畳ほどの仕事場で、政夫さんと二人で一日中、手先に神経を集中する毎日です。

仕事は大きく分けて指輪などの修理加工、注文製作、再生加工の三つ。中でも修理や再生は、高価なものや形見の品が多いだけに一つ間違えば大変なことに。同業者がなかなか手がけたがらない作業も、ここで出来ないことはないほどです。

細工した跡が残らないように磨き上げる

上／野本洋二さん
下／野本政夫さん

数年前に銀がブームになったときなどは、二人で一日百本の加工作業を二年続けたとか。銀自体が熱を伝えやすく余計な箇所まで傷める恐れがあることと、指輪のサイズを広げたり縮めたりした痕跡を残さないようにする技術がとても難しいことから注文が集中したのです。実際に政夫さんから、銀の指輪を切断して加工した箇所を見せてもらいましたが、一点の曇りもなくぴかぴかでした。

オリジナル作品から。上は洋二さん十九歳のときの指輪

野本洋二さん 政夫さん――野本貴金属加工所（札幌市）

パソコン、携帯お手の物 〝女性のいる限り〟 親子で創業百年めざす

ふと見ると、二人が黙々と作業を続ける膝の上に大きなこね鉢。これは作業中に飛び散る金銀の粉を受けるもので、年に一回、分析屋さんなる人が来て部屋の一斉清掃。ちり紙から流しの下まですべての〝ゴミ〟を回収していくのだとか。そして後日、また金銀に分別されて戻ってくる――

――「子供の頃は手水鉢の底にたまった金の粉がお年玉でしたから、わざと手に金粉をつけて洗ったものでしたよ」（洋二さん）。「ここからゴミステーションに行くものは何もありません」（政夫さん）。やはり親子は正真正銘の職人でした。

作業は親子で一日中向き合って――
継承がうまくいっている秘密の一つかも

野本貴金属加工所
札幌市北区新川3条11丁目1－18　TEL(011)761－2715

道具で道草30年

土産物屋の主人が語る温泉街の栄枯盛衰は高度成長以来、日本人が失ってきたものまで思い出させてくれた――

坂 一敬

レトロスペース坂会館・館長（坂栄養食品・開発部長）

クジラの骨、失った言葉。

たまにはのんびりしようと思い、温泉に出かけてみた。ひと風呂浴びた後、何もすることもないので、浴衣の上に半てんを羽織って外に出た。下駄の鼻緒が、足の指に忘れていたあるなつかしさを思い出させてくれた。

林立する温泉ホテル群を後にマチの方に足を向けてみると、これはもう、ものすごい寂れようで、「こんなところを歩いていても仕方ない。ホテルに帰るか」と思ったのだが、せっかく来たのだからと思い直して、目に入った土産物屋に入ってみた。

店内を一巡したのだけれど、買いたいものはまったく見当たらない。薄くホコリをかぶった品々に客を引き付ける力が感じられない。店を出ようとしたら、多分お店のご主人だろう、奥から出て来て、お茶でもどうかと言う。私はマチの感想や店のことを言うと、

「昔は、ここもとても活気のあるところだった。温泉旅館もお客さんをもっぱら泊めるだけにして、マチの方にお客さんの足が流れるようにしてくれていた。だからお客さんは食事や風呂の前後はマチに出て、土産物を買い、ちょっぴりあやしげなバーで、あまり若くない女の子を相手に色の付いた酒を飲み、ストリップ小屋で少しトウの立ったお姉さん方の裸を見て、自分の身体と比べ、まあこんなものかと、それなりに満足してまた旅館へ帰っていったもの。ところが大資本が入ってくると、旅館はプール付きの高層ホテルに変わり、中に土産物や新しく作った名物を売る店、若い子を揃えた明朗会計のクラブやラウンジ。さらにはロシアから踊り子を呼んでのトップレスショウ。客は一人たりとも外に出さず、全てホテル内で済ませるシステムの完成。お陰でマチは寂れる一方。ゴーストタウンになってしまった。私のところは持ち家で家賃もいらないし、年金暮しだから何とか店を開けていられるけれど、そうでない人はもうやっていけない……」

私、「いい話を聞かせてもらった。ところで、何か私に買えるものはないのかい」

「ああ、ずっと前に仕入れてそのままになっているのがあるけど、見るだけ見てくれるかい」

奥の方から持って来たいくつかの小箱の中を開けてみると、白い牙のようなものに二音の文字が黒く彫り込んである。材質はクジラの骨だと言う。字を読んでみた。信頼、努力、正義、誠実、友情、清純……我々日本人が高度成長と共に捨て去り、今となってはお笑いでしかない言葉が並んでいた。

そのクジラも今、亡びていこうとしている。日本人がそれに拍車をかけている。いや、クジラだけではない。野生の動植物すべてがそうである。デパートで買った甲虫を解体して「電池が入っていない」と叫んだ子供の話を聞いたのはかなり前のこと。

そう思うと何か一つ買っていかなければとの思いに駆られ「友情」の箱を取り上げて千円札をそえて出した。ご主人は丁寧に包装し、セロテープなど使わず最後はシール一枚で留めて、八百円のおつりと共に渡してくれた。安い。おそらく昔の仕入れの値段だろう。

「お客さん、もしよかったら上がって一杯飲んで行かんかい」酒はやめて久しいけれど、断る理由は何もない。小皿たたいて層雲峡の夜が更けていく。

カムイミンタラ　黒岳を
赤く染め行く　落日の
出湯の里に　一人来て
過ぎし昔を　訪ぬれば

柱状節理　屏風岩
銀河の滝が　糸を引く
風が友呼ぶ　大函に
何を語るか　ユリの花

美しい言葉もクジラも亡びつつある。でも本物のクジラの骨かどうか……

本づくり相談室

Q

何から取りかかれば……

周りで自費出版している人が何人かいて、なかなか立派な本を見せてもらいました。私もそろそろ自分史をまとめたいと考えていますが、まず何から取りかかればよいでしょうか。

A

まず年表を作ろう

最近は自分史に限らず長年にわたる趣味の分野などの本をつくる人も見られます。自分史もまとめると決めたらそれなりの準備が必要です。

その構想を練ったり原稿を書き進めていく上で、最も拠りどころとなるのは自分史年表です。

今年こそ始めたい自分史づくり

60年なり70年なりの人生の、すべての出来事を記憶しているはずもありませんので、思い出したり調べたりしながら、何年に何があったかという年表を作成していくことです。

端的なところで誕生から入学、卒業、就職、結婚、家庭、家族といった流れは、概ねどなたも同じでしょう。それらを年月日と共に一覧にしていけば、これが自分の人生かということになります。

でもこれだけではまだ原稿を書き起こせません。その当時の家族構成や住んでいた地域、友人のこと、世の中の出来事、流行、世相なども加えておくとよいでしょう。

こうして出来上がった年表を眺めていると、自分の歩みをいくつかの時代に区切れること、ハイライトはどこかということ、詳しく書きたいところといったことがわかってくるはずです。

そうなると自ずと本の構成が決まることになります。目次も浮かんでくるのではないでしょうか。これで少し書けそうな気分にもなってきます。ぜひ挑戦してみてください。

時計のある風景

何かに追い立てられるように過ぎていく毎日。
いつもそこにある時計に、
足を止めることを忘れていませんか。

区民センター

栽培、この地に始まる――。

ウムー、上は確かに札幌時計台だけど、下の饅頭のような形をしたものは何だろう――ここへ初めて来た人はしばし考え込むかもしれません。第一ヒント、札幌市東区。第二ヒント、伝統作物。わかったでしょう、答えはタマネギです。東区のみならず、札幌市民が全国に誇ってよいのは、〝わが国の玉葱栽培　この地にはじまる〟（札幌玉葱記念碑）からです。百二十年前にさかのぼる栽培の歴史。シベリアや東南アジアにまで広がった銘柄「札幌黄」。そんな過去がこの単純な造形に凝縮されているわけです。マスコットキャラクター「タッピー」と共に東区の象徴です。

小樽職人義塾大学

技を伝える出前講座

第十六号で紹介した小樽市の松田和久さんら小樽職人義塾大学一行が十月十六日、札幌市豊平区のあやめ野中学校を訪れ、手仕事のすばらしさを生徒たちに伝えました。指導に当たったのは建築、印章、宝飾、紋章、仏壇塗箔のベテラン職人たち。体育館に用意されたそれぞれの職業の道具を前に、最初は戸惑いがちだった生徒たちも次第に熱中し、出来上がった作品に満足げでした。

経済産業省の補助を受けての〝出前講座〟ということですが、こういう試みがもっと広がって、職人を目指す若者が増えて欲しいものです。

仏壇に金ぱくを張る技術の持ち主、藤本寛さん

紋章を型取る技法を教える千葉豪さん

棟梁（1級建築士）の藤田和久さん

印鑑の松田和久さん

谷沢典雄さんは指輪の作り方の実技を

編集室

街が変わり、人が変わりしていく中で、小紙に取り上げてみたい仕事やその技の持ち主もまた減っていくようです。いま残しておかなければという思いと、この情報化の時代に気持ちが和むような話題を提供していきたいという思いを、なかなか表現しにくくなっているのは事実です。紙面にふさわしい人や仕事をご存じでしたら、ぜひ編集部にご一報くださるようお願いします。

■■■

●自分史セミナーの「出前」します　印刷紙工では毎年、定期的に本づくり講座を開いていますが、都合で来られなかったり、お仲間だけで話を聞きたいという人のために、本づくりセミナーの出前を行っております。三人以上のお集まりで、会場をご用意いただければ、日時を相談の上、編集者と印刷担当者がお伺いして、いろいろとアドバイスさせていただきます。

●記念誌づくりもお手伝い　企業や団体の節目の設立周年（二十周年、三十周年…）にちなんだ記念誌づくりもお手伝いいたします。企画から承ります。

●小紙をお送りします　小紙をご希望の方には、定期的に無料でお送りしております。印刷紙工までお申し込みを。

デザイン・イラスト／伊藤公修